ほっかいどう

かいはつグラフ

北海道開発局広報誌

Vol.24

2001 季刊

特集●人と自然を見つめながら

「自然復元型川づくり」
リサイクル型農業
地球にやさしい官庁施設ほか

事業紹介／災害に強い地域をつくるために
動き出した地域防災パートナーシップ

しごと最前線／24時間、365日
～道路交通管理室～

北国賦／田舎暮らしに憧れますか。
～柳澤　緑さん

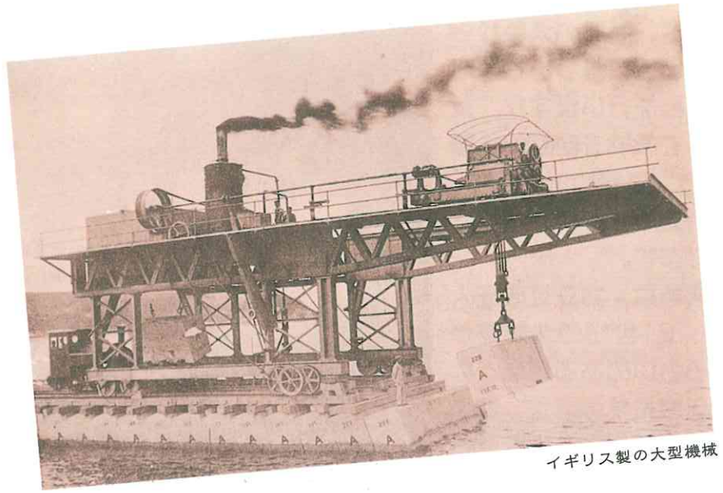
開発事業のあゆみ／陸地を掘り込み港をつくる
～北の暮らしを支える苫小牧港の歴史～

ピックアップ／札幌都心部の快適な交通に一役！
各国研究員が成果を一般市民に公開

ちょっとひといき…道の駅／体験施設のある駅

北海道開発グラフ
通巻第二十四号　二〇〇一年（平成十三年）三月
監修　北海道開発局広報室　発行　財団法人北海道開発協会
〒〇〇一-〇〇二一　札幌市北区北11条西2丁目　セントラル札幌北ビル
☎〇一一（七〇九）五二一一　FAX　〇一一（七〇九）五三三五

開発の日々のひとコマ



イギリス製の大型機械

防波堤の上に鉄道？

これ、実は防波堤を造っているところなのです。時代は明治。コンクリートの厚い板を、レールの上を動く機械で先へ先へと斜めに立てかけていきます。まるで、ドミノの列の上をクラシックな蒸気機関車が走っているように見えます。初代小樽築港事務所長廣井勇博士が試行錯誤のうえ考案した方法で、こうしてできた防波堤は、１００年経った今も現役で小樽の港を守っています。

表紙　春の清流、輝く花。

雪解け間もない４月の羊蹄山麓。日本を代表する清流尻別川の支流の風景です。清らかな水辺に咲くエゾノリュウキンカの群生。茎が直立して金色の花をつけ（立金花）蝦夷にはえるという意味があります。北の大地にあふれる生命の輝き、希望に満ちた春を象徴して咲き誇っているかのようです。

あしたを創る　北の知恵
北海道開発局

特集 人と自然を見つめながら

どこまでも広がる澄んだ空、のどかな田園風景、野生動物の生息する山々。北海道の恵まれた自然環境は、私たちにとって、次の世代へ引き継がなければならない大切な財産です。この豊かな自然を守るため、北海道開発局でもさまざまな取組をしています。

北海道開発局環境保全基本方針

北海道開発局では、これまでも環境に配慮しながら事業をすすめてきましたが、北海道の総合的な開発を進める主体として、さらに積極的な環境保全への取組を進めるために、平成12年5月に、「北海道開発局環境保全基本方針」を策定し、現在その推進に努めているところです。

基本理念
「恵まれた環境を誇りを持って
次世代に引き継ぐ北海道の実現」
環境保全の基本的方針
① 自然との共生の推進
② 循環型社会形成への貢献
③ ゆとりのある生活環境の創出

「自然復元型川づくり」

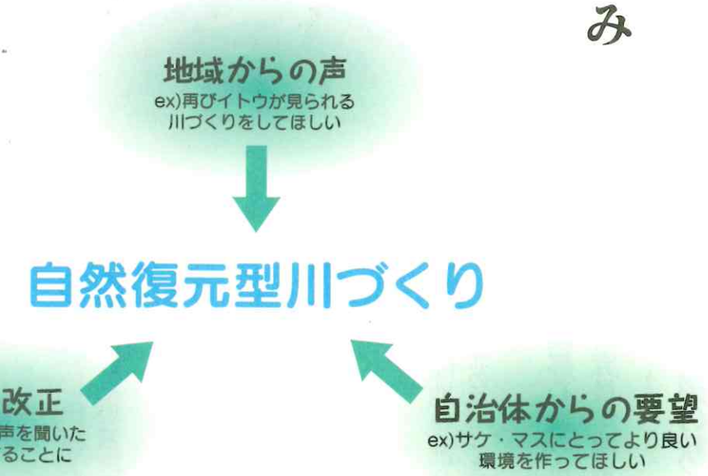
標津川での新たな試み

自然環境を守るため、これまでにない新しいかたちの河川整備事業がはじまります。

道東を流れる標津川の「自然復元型川づくり」です。これは、川の蛇行を復元したり、河畔林の保全・育成などを行おうとするもので、平成13年度からスタートします。

標津川は、今まで、蛇行した部分を切って、直線化する事業が主でした。洪水対策のためと、泥炭地帯だった流域の水はけをよくするために、地下水位を下げる必要があったからです。これらの改修事業は、流域の安全度を格段によくし、また湿地を利用可能な土地に変えるなど、地域の発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、時代の変化とともに標津川を取り巻く状況も、従来とは大きく変わってきました。河川環境について、地域からの声が多く出るようになったのです。



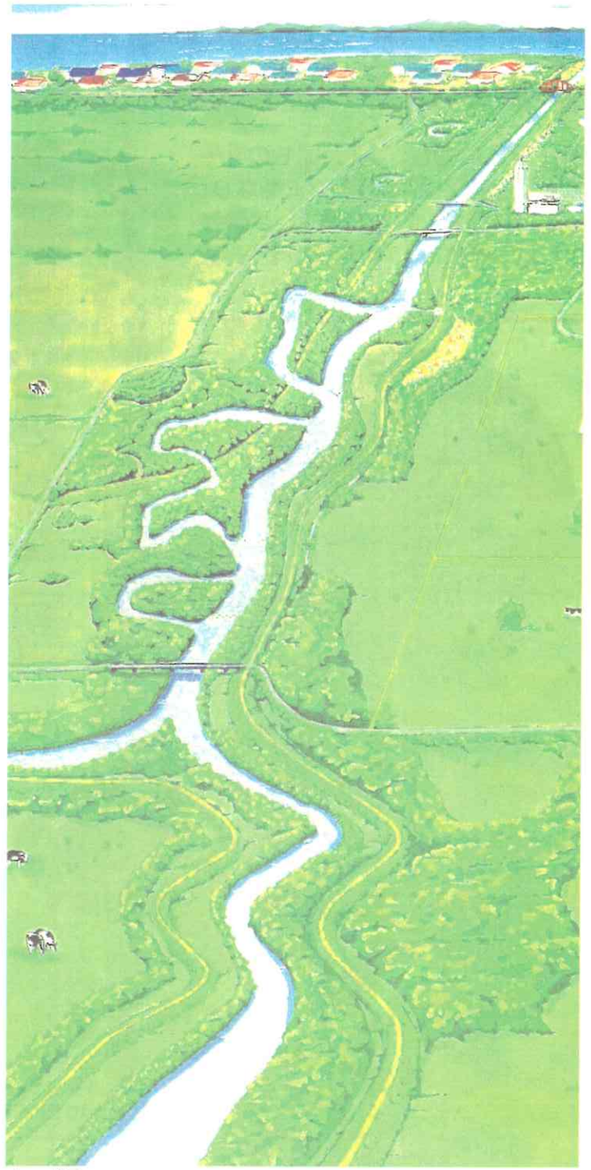
河川法改正って・・・？

河川を整備するための法律、河川法。これが平成９年に改正され、それまでの河川整備の目的である「治水」「利水」に加え、「河川環境の整備と保全」が盛り込まれました。これによって、河川を整備するときには、洪水を防ぐための流量などを決める河川基本計画とともに、河川整備計画を作ることになりました。この河川整備計画は、実際に整備をする開発局だけで作るものではなく、流域の方々の意見などを取り入れて作る、「こういう川にしたい」という計画です。

こうした地域の声を受けて、北海道開発局では、標津川で「自然復元型川づくり」に取り組むことになりました。これは、洪水の危険から地域を守りながら、できるだけ川を自然な姿に戻そうとするものです。現在、方針として、蛇行復元（旧川復元）や河畔林の保全・育成、もともと河畔に生えているヤナギの枝で河岸を覆い保護することなどを想定しています。計画のとりまとめにあたっては、地域の方々から十分にご意見をいただき、さらに専門家にご協力いただくことを考えています。具体的な動きとして、平成12年11月に「第一回標津川流域懇談会」が開催されました。この懇談会は、専門家や地域の方々などで構成されています。これまでに2回の懇談会が開かれ、標津川に対するさまざまな意見・要望が出されています。また、多くの技術的課題の解決に向け、「第一回標津川技術検討委員会」が平成13年3月に開催されました。

この事業は、北海道の特性を活かした、これまでにない取り組みです。標津川では、河川沿いに広大な未利用地があり、このことが蛇行復元に取り組めるひとつの重要な要素となっています。

しかしながら、技術的な課題も数多くあります。例えば、蛇行復元についてですが、川には土砂の移動がつきものであるため、単純に本川と旧河川をつないでも、すぐに旧河川の流入部が埋まり、旧川に水が流れていかなくなってしまいます。「自然復元型川づくり」を行う際には、十分な検討と様々な工夫が必要であり、そのため、まず何年かは試験的な取り組みが中心になるものと考えています。


イメージ図

標津町長
小田桐　四郎氏

標津川はもともと曲がりくねった自然河川でしたが、これを直線化することで土地の水はけが良くなり、豊かな牧草地を創り出すことが出来ました。しかしその一方で、速くなった水の流れが河岸の砂を削り、それが河口部に溜まって、サケが遡上しにくくなっているのではないかと懸念されるようになりました。

ですから、「自然復元型川づくり」がスタートすることは大変嬉しく思っています。この事業によって、砂が運ばれにくくなるとともに、魚の生息場所ができるので、サケのみならず様々な魚に優しい川となるでしょう。私が子供の頃は、水の深さが腰の高さくらいでも川底がよく見え、2メートルクラスのイトウも棲んでいました。大きなイトウがまた見られるようになればいいなと思っています。

また、標津町では酪農牛のふん尿を利活用する資源循環型の酪農を目指していますが、標津川に河畔林を造成することによって汚濁物質の河川への流入がより防止されるので、さらなる水質の向上に結びつくと期待しています。

さらに今後は、環境教育の場としての活用や産学官協力による現地研究施設の設置など、人と自然の調和に役立つ場所にもなればと考えています。

リサイクル型農業

国営環境保全型かんがい排水事業

道東の根釧台地に位置する別海町は、人口1万7千人に対し、11万頭もの乳牛が飼育されている日本一の酪農王国です。年間の生乳生産量は43万トンにもなり、その量は実に東京都民が1年に飲む牛乳の量とほぼ同じです。しかし最近、牛の頭数が増えるにつれ、別海町には悩みができてきました。それは、牛から出るふん尿の処理と、その有効利用です。

牛のふん尿は、畑にまいて肥料として使用することができますが、近年は1戸あたりで飼育する頭数が多くなってきていることから、畑に散布するまでの間、ふん尿を置いておくための施設の整備が追いつかないなど、管理が行き届かない面がでてきています。その結果、雨などで流れた汚水が地面に染み込んで、地下水を汚染したり、川に流れ込んで水質を悪くしたりしています。ふん尿だけでなく、畑で使用する化学肥料が川へ流れ込むことも問題になっています。川の水質低下は、酪農と同じく町の主力産業である漁業に重大な影響を与えるので、ふん尿処理は、この町全体の課題となっているのです。

こうした問題に対応するため、北海道開発局では、別海地区で国営環境保全型かんがい排水事業を進めています。これは、ふん尿などの有機物質をきちんと土に戻すことにより、生産性の向上をはかり、さらに環境を守ることも目的とした事業で、農業用の用・排水施設や、遊水池、河畔林などの整備を一体的に行います。また、家畜のふん尿を発酵させて肥料にする肥培かんがい施設を作ることで、家畜のふん尿を効果的に再利用できるようにします。こうした環境保全を念頭に置きながらの大規模な農業事業は、全国でも初めてのもので、その効果に注目が集まっています。

家畜のふんからエネルギー
ふん力（りょく）

積雪寒冷地における資源循環プロジェクト

いまや酪農家だけの問題ではなくなった家畜のふん尿処理ですが、実はふん尿は、リサイクルできる立派な資源です。別海町に、家畜のふん尿をエネルギーと肥料に換える、バイオガスプラントが建設され、4月から運転を始めます。ふん尿をリサイクル活用して、循環型社会をめざすものです。

このプラントは、開発土木研究所が主体となって行う「積雪寒冷地における資源循環プロジェクト」の中心施設で、これから5年をかけて実証実験をすすめていきます。

このプラントでは、1日あたり1000頭分の牛のふん尿を処理できます。まず、酪農家から出たふん尿は、1箇所に集められて、メタン発酵させます。そのとき発生するバイオガスを利用して発電機のタービンを回転させ、発電します。一方、発酵を終えたふん尿は、液体の肥料（液肥）になり、畑で使用することができます。この液肥は、臭いも少なく、ふん尿をそのまま畑にまくよりも効果が高いことがわかっています。

このプラントの発電機で作られた電気と、発生する熱は、1日で標準家庭200戸分の電力になると計算されています。この電気は、施設自体を動かすのに使われるほか、余った分は売電する計画もたてられています。発電の際発生する熱は、450戸の風呂をわかすことができると考えられています。この熱は、プラントの保温に使い、余った分は、ハウス栽培など、地域で利用できるよう、研究を進めていきます。

将来的には、ふん尿だけでなく、水産廃棄物を受け入れることも考えています。

北海道の豊かな自然を守りながら農業を支援するこのプロジェクトには、酪農家の方々はもちろん、地域全体からの期待が寄せられています。

別海町 佐々木　春男さん
このプロジェクトに参加される酪農家の一人。

最近は環境問題がクローズアップされているので、私たち酪農家の意識も変わってきました。ふん尿が土や水を汚染しないよう、ふん尿を置いておく場所をコンクリートで固め、汚水が地面にしみ出さないようにするなどの対策をしています。

今回のこのプロジェクトには、大変期待しています。ただふん尿を処理するということだけでなく、それから一歩進んで、エネルギーや肥料に換えられるというのはとても画期的なことですね。発酵してできる液肥の効果にも期待しています。これで牧草に使用する化学肥料が少なくなれば、環境にも、牛にもよいでしょう。

また、牛舎の周りからふん尿がなくなるということは、今までの酪農風景が大きく変わることでもあります。酪農に対するイメージがよくなるので、酪農体験にくる観光客が増えるのではないでしょうか。そうなると町も活気づくでしょうね。

熱をビニールハウス栽培に利用するというのも、いいアイデアだと思います。別海産のメロンなどができるようになったらいいですね。今後このプロジェクトが、町の活性化につながればいいと思っています。

メタン発酵槽（右）とガスホルダー（左）

地球にやさしい官庁施設を目指します

平成12年に完成した釧路合同庁舎。この建物は、北海道開発局営繕部で設計、建設したものです。
一見普通に見えるこの建物、実は環境にやさしい技術が満載されているのです。
地球にやさしい「グリーン庁舎」をご紹介します。

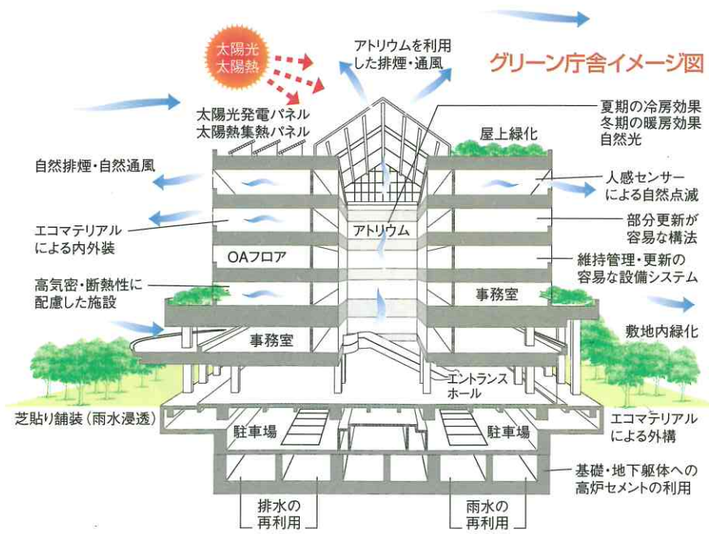
地球温暖化の原因の一つでもある二酸化炭素、実にその3分の1が、建物の冷暖房や、その建設過程などから排出されるものです。そこで、平成9年、当時の建設省（現国土交通省）は、「環境配慮型官庁施設計画指針（グリーン庁舎計画指針）」を策定しました。これは、官庁施設を計画・設計するときの基本的事項を定めた、新たな環境対策のガイドラインです。

この方針では、地球への優しさを、ライフサイクル二酸化炭素排出量（LCCO$_2$）を使って判定します。また、新たに建物を建築するときには、「グリーン庁舎チェックシート」を用いて計画・設計します。このシートは、1枚で、周辺環境への配慮ができているか、省エネ対策はなされているか、耐久性に優れているかなど、設計者が自ら採点するようになっています。

平成12年に完成した釧路合同庁舎は、雨水の再利用や、太陽光発電など、多くのグリーン化技術を導入しています。また、免震構造も取り入れ、耐久性にも優れています。

平成13年度には、グリーン庁舎を目指して、旭川合同庁舎の建設が始まります。

LCCO$_2$・・・材料の運搬、建設、改修など、建築のさまざまな段階で出るCO$_2$をすべて集計したもの。理想的なグリーン庁舎では、現在の一般的な水準の官庁施設に比べて、約30％のLCCO$_2$を削減することができます。また、10％のコストを削減できると計算されています。



エコロジー&エコノミー

釧路港西港防波堤「エコポートモデル事業」 2つのエコ

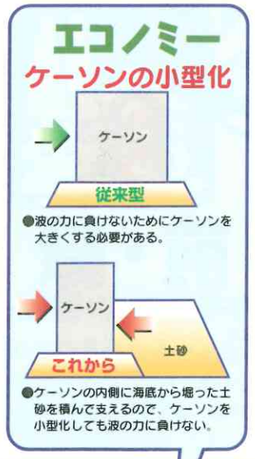
道東の物流を支える釧路港西港で建設が進められている防波堤は、「環境に配慮＝エコロジー」、「コストダウン＝エコノミー」という、2つの「エコ」効果があり、「エコポートモデル事業」として認定されています。

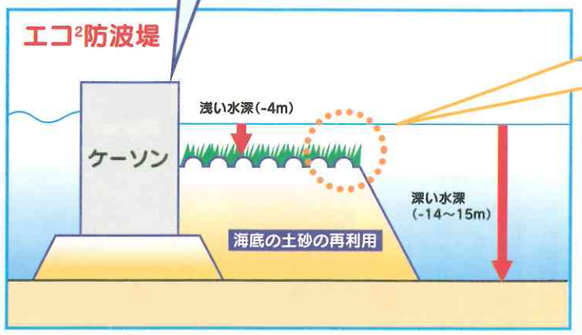
エコノミー効果

防波堤を造るために掘った海底の土砂を、防波堤の背後に積み、防波堤の本体であるケーソンを支えます。これによりケーソンを小型化することができるので、建設コストが削減できます。また、土砂をリサイクル活用するので、土砂の処理費が少なくて済みます。

エコロジー効果

防波堤の背後は水深が浅くなるので、太陽光が届き、コンブなどの海草類が育つことが期待できます。また、コンブが育つと、さまざまな魚が群れ集まって、豊かな自然環境が得られます。





「エコポートモデル事業」とは??

環境と共生する港湾（エコポート）の実現を促進するため、国土交通省が、全国の模範となる事例を「エコポートモデル事業」として認定し、港湾環境基盤を重点的、先行的に行うものです。この防波堤は、平成10年に認定されました。

緑の豊かな道路に

函館新道道路緑化

工事中の函館新道

植栽後の予想図

3月24日、函館新道の自動車専用道路区間が、昨年から開通している部分とあわせて全線開通しました。いま、この函館新道では、新しい道路の緑化について検討がすすめられています。

これまでも道路の建設時には、周辺の環境に配慮し、のり面（道路を作るために土を切ったところや盛ったところ）に芝を植えるなどしていましたが、今回はより効果的な緑化を行うために、「函館新道緑化検討委員会」を設置しました。この委員会は、具体的な緑化の方法を話し合うもので、道路の専門家だけでなく、地域住民の方や樹木医の方などに参加していただいています。

現在検討されているのは、のり面に、できるだけ地域に生育している種類の木を植えることなどです。これにより生態系を壊さずに確実に木が定着すると考えられています。また、芝でなく木にすることで、強風による土ぼこりや雪で視界が悪くなることを防ぐことができます。

しごと最・前・線

開発局と地域を結ぶ
主役はまさに“ひと”
地域の人々と一緒に考え、行動する
その最前線に立つ姿を紹介します

「24時間、365日」～道路交通管理室～

札幌開発建設部　道路交通管理室
道路交通管理専門官　**関根　和一**

道路交通管理室では、開発局で整備し供用している高速道路の日高自動車道と深川留萌自動車道、そして平成13年3月に供用を開始した函館新道の計3路線を管理しています。

ここには、道路上の各所に設置されたカメラから常に路面の映像が送られてきます。また、気象状況や、1kmおきに設置されている非常電話からの通報、道路パトロールカーからの情報等も全て集まります。そして気象情報などドライバーに必要な情報は道路に設置されている情報板などにリアルタイムで表示し、事故や異常気象が起こった場合には、現地の管理ステーションに連絡して直ちに対応にあたります。場合によっては、警察など他機関と調整しながら、通行止めなどの規制をします。冬期間はとくに、吹雪による視界不良などで、交通規制を出すことがどうしても多くなります。自然が相手なので、先を読むことは大変難しいのですが、臨機応変な対応が一番重要です。

高速道路に休日はありませんから、私たちは24時間365日を交代で勤務しています。勤務のときは、事故や天候の急変など、いつ何が起こるかわからないので、常に気が抜けません。とくに非常電話のブザーが鳴ると緊張します。また、ここは、交代制勤務のために、全員が一同にそろうということがありません。普通の職場であれば1度で済む会議も、3回に分けて開催しなければならないほどです。だからこそ情報をきちんと共有することには気を遣い、チームワークを大切にしています。

安全な道路確保のために、私たちも努力していますが、一般ドライバーの方々の理解と協力も欠かせません。高速道路では、小さなことでも大事故につながる恐れがあります。走行中に燃料切れになったり、荷物を落としていったりする車を見受けますが、これらは自分の小さな注意で防ぐことができます。運転の前には、車をチェックしてみてくださいね。

道路の映像は、24時間このモニターで見ることができます。
気象状況などのデータも、常にここに集まってきます。

ちょっとひといき…道の駅

道の駅で手作り体験を楽しもう！

その土地ならではの特産品の加工体験やクラフト体験を気軽に楽しみたい―。今回は、そんな声に応えてくれる体験施設のある道の駅にスポットを当ててご紹介します。

田園の里うりゅう　〔国道275号　雨竜町〕

町の特産品を使って安全で美味しい食品づくり

館内は中央ホールが吹き抜けになって開放的で明るい

はるかに暑寒別の山並みを望む、田園に囲まれた国道275号沿いにある道の駅です。これからの登山シーズンで賑わう雨竜沼湿原への入口にも位置し、館内に設置された2台のタッチパネルからは最新の観光情報を引き出すことができます。「田園の里うりゅう」の特徴は館内に食品の加工体験室があること。この加工室では普段、地元の農家の主婦たちが集まって漬物やソーセージ、ソバ打ちなど、地元の農畜産物を生かした加工製品を作っています。町内外の方でも気軽に参加できるのが、ソーセージやアイスクリームなどの手作り体験実習。材料の関係でいずれも1週間前までの予約と、最低3人から最高5人までの人数が必要ですが、調理道具も材料も揃っているから当日は手ぶらでOK。指導員が丁寧に指導してくれるので失敗なく、手作りならではの自然の味わいを楽しめます。ぜひ友達や家族連れで気軽に参加してみてください。また、この春から注文による手作りアイスを1ℓ900円というお得な値段で提供する予定なので、お楽しみに（1週間前までに要予約）。7月中旬から9月中旬の週末には駐車場前のテントで、町の農家直送の野菜や果物を販売しますので、どうぞお立ち寄りください。

売店の人気商品は、簡単に漬け物が漬けられると評判の「漬物の素・アラーカンタン」（350円）。米所・雨竜町特選米もそのおいしさでオススメです

新鮮な材料を使って約2時間でアイスクリームのできあがり。生クリームをたっぷり使用しているので舌ざわりがよく、後味もすっきり。残りはパック（料金別途）に詰めて持ち帰れます（持ち運びに要クーラーボックス）。完成品3ℓで材料・施設使用料含めて約4000円

☎0125―79―2100

おんねゆ温泉　〔国道39号　留辺蘂町〕

クラフト体験工房で木と触れあうひととき

インフォメーションセンターに置かれたリアルタイム映像で、石北峠の道路状況が一目瞭然

大雪観光圏と阿寒・網走・知床観光圏を結ぶ中継地点にある道の駅です。この駅のシンボルタワー、「からくりハト時計塔」は必見。塔から1時間ごと（午前8時から午後6時まで）に、からくり人形の森の精たちが現れて音楽演奏（約5分間）をする仕組みになっていて、このショータイムまで待って見学していく人も多いという人気の施設になっています。さらに、時計塔に隣接して建つ「果夢林の館」も見逃せません。館内には、地元特産品である木工芸品を展示販売するショップ、木製遊具を設置した子供から大人まで楽しめる遊び室、手軽に木工製作ができる「クラフト体験工房」の3つの空間があります。中でも体験工房には、木工クラフト作りに必要な専門的な機械や工具をズラリと取り揃えてあり、誰でも利用できるのがうれしい。もちろん手ぶらでいいんです。ショップには干支や動物シリーズのおもちゃの木工キット（350円～）を多種揃えていますから、お好きなキットを購入して工房へ。工房では常駐の指導員が機械の使い方にはじまり、作品を完成させるところまで丁寧に指導してくれます。簡単なものだと1時間ぐらいで、あなただけのオリジナル作品が完成。ぜひ、立ち寄って手作りの面白さや木のぬくもりを体感していってください。

「からくりハト時計塔」と「果夢林（かむりん）の館」

木工芸品を展示販売するショップ。ここで木工キットを購入すると、工房が無料で使用できます

☎0157―45―3344

クラフト体験工房でそれぞれの木工製作を楽しむ参加者。電動工具の扱いも指導員の手ほどきをうけながら進めていくので意外とカンタン。この日はカメの木工おもちゃのキット（350円の半製品）を購入して、約1時間で完成

道の駅の詳しい情報は、北海道開発局のホームページでもご覧になれます。http://www.hkd.mlit.go.jp

自然との対話を楽しむ

支笏湖西側の山々を源とし、羊蹄山、ニセコ山系の山あいを流れる尻別川。四季折々の美しい景観を見せるこの川には、サケやサクラマスが遡上します。今年ももうじき長い冬が終わります。ようやく訪れる釣りのシーズンを心待ちにしている人も多いでしょう。

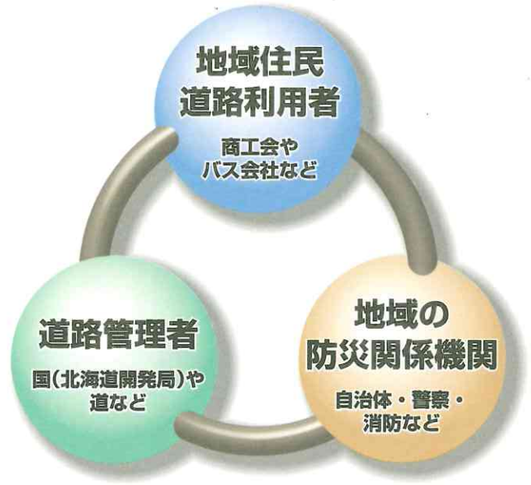
釣りだけでなく、カヌーなどのウォータースポーツも盛んなこの尻別川は、毎年行われる水質調査で、平成１１年に全国１位になりました。北海道開発局では、これからもこの美しく貴重な環境を大切に、自然と調和した整備を進めていきます。

災害に強い地域をつくるために

動き出した地域防災パートナーシップ

いま、後志と渡島北部・檜山地方で、地域住民と行政機関が力を合わせて道路を守り災害に強い地域をめざす「地域防災パートナーシップ」づくりに向けた取組が行われています。
ここでは、全国に先駆けて行われているこの取組を紹介します。

積丹半島をめぐる国道229号（神恵内村西の河原から積丹町神威岬を望む）



地域が一体となった防災の必要性

一般国道229号は、積丹半島から渡島半島の日本海沿岸を通る唯一の国道で、地域の暮らしや産業を支える大切な幹線道路です。また、奇岩を配した美しい海岸線の景観は地域にとって大切な観光資源となっています。しかし、平成8年に豊浜トンネルで大規模な岩盤崩落が起こり、尊い人命が失われました。また、平成9年には第2白糸トンネル岩盤崩落が発生しました。これらの災害により、地域に密着したこの国道が長期間の通行止めとなり、生活や産業に大きな影響を及ぼしました。これらの事故を受けて防災専門家らが検討を重ねたなかで、地域住民と一体となった防災の必要性が認識され、「地域防災パートナーシップ」の考え方が提唱されました。

「地域防災パートナーシップ」とは？

「地域防災パートナーシップ」とは、災害に強い地域をつくるため、地域住民や道路利用者、自治体や警察・消防などの防災関係機関、北海道開発局などの道路管理者が緊密な連携・協力を図りながら、それぞれの役割を果たすことです。

たとえば、道路を頻繁に利用する地域の方々が、「小さな落石を見つけた」、「斜面の様子がいつもと何か違う」などの情報をすぐに道路管理者などに知らせることで、より一層、災害を未然に防ぐことが可能になります。また、災害が発生したときに、すべての防災関係機関がいち早く情報を共有し、地域住民やドライバーに迅速に伝える体制が整えば、被害を最小限にくい止めることに役立ちます。

このような取組を、道路管理者の行う防災対策工事や道路パトロールなどとあわせて行っていこうというのが「地域防災パートナーシップ」の考え方です。

地域防災パートナーシップを築くために

道路防災連絡協議会の設立

後志地方（平成12年8月）と渡島北部・檜山地方（平成12年11月）にそれぞれ道路防災連絡協議会が設立されました。この協議会は、地域住民と関係機関が相互に連携して道路災害を防止し、災害発生時の被害を最小限に止めるために設立されたもので、支庁、自治体、警察、消防、関係団体、北海道開発局（開発建設部）などで構成されています。この協議会では、地域防災パートナーシップの推進、道路防災に係わる情報提供及び情報交換、日頃の防災意識の高揚について検討が進められています。

地域防災シンポジウムの開催

平成12年10月、岩内町で後志地方道路防災連絡協議会の主催によるシンポジウムが開かれました。テーマは「地域防災パートナーシップの構築に向けて」。

参加した専門家などから、「住民・行政・マスメディア・研究者の連携や防災情報の共有が大切」などの意見が出され、来場した約600人の方々がこれからの地域防災のあり方について考える機会となりました。

なお、渡島北部・檜山においても、平成13年度に地域住民を対象とした講演会などの開催を予定しています。

北海道開発局のしごと

道路防災に関して、たとえばこんな取組をしています。

毎日のパトロール。必要に応じて、専門家による点検も行っています

危険な岩を取り除いたり、落石被害を防止するための様々な工事

携帯電話が通じない場所にある非常電話ボックス。受話器をあげると自動的に道路事務所につながります

1kmごとに設置している連絡標識。管轄道路事務所の電話番号を表示しています

「ROUTE229」と「岩のふしぎ」

北海道開発局では、専門家の方々の監修による道路防災マップ「ROUTE229」を作成しています。この冊子には、国道229号の重点監視区間やトンネル防災施設の説明などが載っています。また、どんな現象を見たら道路管理者に連絡すべきかがわかるようになっています。

「岩のふしぎ」は、岩ができて壊れるまでをわかりやすく説明した子供向け冊子です。

今後、自治体や道の駅などを通じて配布する予定です。

北国賦

田舎暮らしに憧れますか。

ファーガス・ポイント店主
柳澤　緑

「雑誌でお宅のこと、読みました。私も将来、田舎暮らしをしたいのでアドバイスしてもらえませんか。」

ある日、東京の方からこんな電話をいただいた。この方に限らず、新聞を見た、雑誌で知ったという方々が直接来店したり、電話で連絡してくることがよくある。

平成8年に開業した私達夫婦のファーガス・ポイントは、人口約3、600人の小さな町・黒松内のはずれにある小さな喫茶店だ。客席は20席そこそこ。特に宣伝しているわけではないが、なぜか取材が多い。いわゆる田舎の町にあって、紅茶と手づくりケーキをメインにした喫茶店が珍しいのか。あるいはIターンUターンの典型としてわかりやすいのかもしれない。

「田舎暮らしをしたい」という方にまず申し上げるのは、けっこう根性がいりますヨということだ。次にこちらから伺うのは、何をしたいのか、そして何ができるのかということ。よく考えてみると、これは都会へ行く時にも同じことが言える。私は若い頃に札幌から東京に出たが、なぜ東京へ行くのか、何がしたいのか、かなり考えた覚えがある。なんとなく行ったら挫折するか、流されてしまうか。どちらにしてもきっと情けない思いをする。世間知らずの女の子でもあれこれ考えるほど、当時、北海道から東京へ出て行くには覚悟が必要だった。

慣れ親しんだ生活や社会から違う場所に移り住むのは、都会

黒松内の自然に囲まれて建つ「ファーガス・ポイント」は、季節ごとの表情で客人を迎える。

から田舎へでも、田舎から都会でも、基本は同じ。覚悟がいると思う。が、なぜか都会の人が「田舎暮らし」と言う時、甘い憧れが漂う。いつかテレビで見た大草原の小さな家で、暖炉を前にコーヒーなど飲む自分。家庭菜園で採れた無農薬野菜に舌鼓を打つ自分。確かにそういう生活は可能だろう。ただ、そこにたどり着くまでに様々な問題をクリアしなければならないことが想像しきれていない。

町営住宅やアパートに入居すればそう問題はないが、田舎で暮らしたいという人は大抵広い土地にポツンと家一軒（まさに我が家なのだが）というイメージを持っている。これを実現するとなると、まず土地を探し、家を建て、電気や水などのライフラインを確保し…という段取りを全て自分が中心になって進めていかなければならない。私達の場合、黒松内に移り住んだ理由が「この町が心底好きでどうしても町民になりたい」ということだったので、役場も町の人も好意的に接してくれた。それでもこの場所に決めるまでに1年かかった。

それにしても「田舎暮らし」ってなに？　具体的なようで、非常に抽象的なんだよなぁ。ブツブツつぶやいている私に、夫が言った。

「俺達は、自然のそばに住みたかったんだよな。自然の多いところがたまたま田舎であって、別に田舎暮らしという形を目指したわけじゃないだろ。」

そうなのだ。ブナ自生地の北限である黒松内の自然が好きなんだ。その中でも一番気に入った場所で、私達はこうして暮らしている。自分達が望んだ生き方を手に入れたんだ…と気持ちが落ち着き、窓の外を見るとアカゲラがクルミの木で朝食をとっていた。

Profile
柳澤　緑　midori yanagisawa

札幌市出身。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。広告プロダクション等勤務後、フリーのコピーライターとして活躍。平成4年、夫と共に横浜から北海道に移住。平成8年12月より黒松内町・添別の森で喫茶店「ファーガス・ポイント」を夫婦で営む。ここは、おいしい紅茶に甘さを控えた大人のケーキ、静かな時間を持てる空間。「リピーターが多いのがうれしい」と緑さん。

陸地を掘り込み港をつくる

～北の暮らしを支える物流拠点　苫小牧港の歴史～

開港当時の苫小牧西港（昭和38年）（空撮）
全体計画（現在の西港）の約５分の１を掘り込んだところで最初の埠頭が供用開始されました。港の奥に黒く見えるのが積み出しを待つ石炭の貯蔵地。

道央の太平洋岸に位置する苫小牧は、札幌、新千歳空港に近く、また、道内主要都市へも高速道路やＪＲにより接続されており、交通の要衝となっています。北日本最大の港・苫小牧港は、周囲に本道随一の大規模工業地帯を擁し、また、数多くの国内外定期航路を有する北海道の物流拠点となっています。今、私たちの暮らしを支える苫小牧港。しかし、５０年前、そこには単調な浜辺が続く原野があるのみだったのです。

堀り込みが進む苫小牧港（昭和35年）
地盤を切り崩しながらポンプで水中の土砂を吸い出す浚渫（しゅんせつ）船東明丸。

勇払原野に港を

苫小牧港の歴史は、大正の初期、勇払川河口を利用した漁港造りに始まります。その後、大正13年、当時の内務省北海道庁の技師、林千秋氏が「勇払築港論」を発表し、空知や石狩の石炭を本州の工業地帯に効率よく積み出すため、勇払原野に内陸掘り込み型の港を建設すべきであると唱えました。この提唱を機に、港湾としての勇払原野・苫小牧の豊かな将来性が認識され、昭和26年、北海道開発局苫小牧港修築事務所（現苫小牧港湾建設事務所）が設置され、本格的な苫小牧港建設がスタートしました。

世界初の内陸掘り込み式港湾

では、直線的な砂浜海岸が続く原野にどのようにして港ができたのでしょう？

昭和26年当時は、室蘭港や小樽港のように自然の湾を利用した港湾建設が主流で、砂浜の海岸に港を建設する技術はまだ確立されていませんでした。特に、海岸に近い浅瀬を漂う砂（漂砂）の動きを知ることは、砂で埋まらない港をつくるために最も重要な課題でした。

そこで、苫小牧港の建設にあたっては、アイソトープによる漂砂追跡調査（機器に反応するガラスの粒を海底に置き、その移動を調べるもの）を実施しています。これは、世界でも初めての試みで、海外でもその成果が高く評価されました。また、大型水槽を用いた各種実験やケーソン（防波堤となるコンクリートの巨大な函）の据付けに新しい方法を採用するなど、当時の最新の技術が投入されました。建設には全国から最新鋭の機械が集められ、12年という短期間で何もなかった砂浜海岸が港として生まれ変わりました。昭和38年、苫小牧港は世界初となる本格的な内陸掘り込み式港湾として供用開始されました。

苫小牧港の誕生
昭和38年4月25日午前11時、苫小牧港の前途を祝福する花火が打ち上げられ、市民の歓迎のなか、第一船の第三北星丸、光輝丸が汽笛を高らかに鳴らしながら入港しました。多くの人々の苦労と努力によって実現した「苫小牧港誕生」の瞬間でした。

苫小牧港の幕開け
昭和26年8月18日、築港現場において、関係者約３００名の出席のもと盛大な苫小牧港起工式が行われました。

現在の苫小牧港（垂直空撮）
左が西港区、右が東港区。西港区の入り口から最奥部までは約6㎞で、昭和50年にはほぼ現在のかたちとなりました。開港当時のすがた（右ページ写真）が全体計画の一部であったことがよくわかります。

西港区入船国際コンテナターミナル
苫小牧港におけるコンテナ貨物量は近年飛躍的な伸びを示し、開設されている国際コンテナ定期航路は、韓国や中国などのアジア諸国や北米など８航路を数えます。入船国際コンテナターミナルは、昭和38年に第一船を迎えた石炭埠頭を作り直して平成９年に供用開始され、国際的な総合物流港に成長した苫小牧港のシンボルとなっています。

一方、浚渫（しゅんせつ）した土砂は港周辺の用地造成に利用され、現在の工業地域の基盤となりました。また、難関だった漂砂による港内埋没対策により培われた技術は、本州の鹿島港、本道の石狩湾新港、さらには苫小牧東港区等の整備に生かされています。

北海道を代表する港として

今年８月に着工から50年の節目を迎える苫小牧港は、現在、道内取扱貨物量の３分の１以上を占める北海道の物流拠点となっています。西港区には、石油精製、電力、食品製造業、木材・木製品製造業、化学工業、自動車工業など数多くの企業が集まり、また、フェリーやＲＯＲＯ船（自動車運搬船）、国内外コンテナ定期航路も開設されています。東港区には、石炭火力発電、石油備蓄、コールセンターなどのエネルギー関連、自動車関連、機械・金属等の企業が立地しているほか、試験研究施設や資源リサイクル施設などの整備も進められています。

東港区の新しい展開

道内の外国貿易コンテナ貨物については、そのほとんどを苫小牧港で扱っています。現在、これらのコンテナ貨物は西港区において取り扱っていますが、近年急激に外国貿易コンテナ貨物が増加しているため、港がとても混雑し、コンテナターミナルも貨物であふれかえっています。西港区のこのような混雑を解消するため、北海道開発局では、平成13年度から、東港区にコンテナにも対応可能な多目的国際ターミナルの整備をスタートさせます。苫小牧港は、東港区と西港区が一体となって、北海道における国内外への玄関口として、その重要な役割を今後とも担っていきます。

寒地土木技術の試験研究を行っている開発土木研究所が独立行政法人としてスタートします

北海道開発局開発土木研究所は、北海道に特有の積雪寒冷という気象条件や軟弱地盤などに対処する試験研究を行う国の機関で、今年の４月から、新たに「独立行政法人北海道開発土木研究所」として生まれ変わることになりました。

独立行政法人は、所管の大臣から指示される中期目標に基づいて中期計画を作成し業務を行いますが、業務全般にわたって柔軟で自立的な運営を行うことで、国民の皆さんに、より質の高い行政サービスを提供できるようになります。

開発土木研究所は、独立行政法人への移行後も、21世紀の北海道がより豊かでうるおいのある地域となるよう、試験研究業務のほか、他の試験研究機関等との連携、研究成果の普及、災害時の支援などに積極的に取り組んでいきます。

えぞたぬき

幾何学模様の竹の冬囲いが新鮮に映える頃。今年もまた選抜高校野球大会が始まる。北海道代表は、東海大四高校、12年ぶり５度目の出場となる。初戦は開幕ゲームで愛知県の強豪、東邦高校。相手にとって不足はない。今の時点ではその結果は知る由もないが、甲子園の大観衆の中での高校生らしい、はつらつとして清々しいプレーが道民に大きな夢と感動を与え、明日への活力になっていることは間違いないだろう。

高校野球が終わると北海道もそろそろゴルフの季節到来となる。昨年の反省を踏まえ、目標を立て、思い思いに練習している姿が、あちこちの練習場で見かけられる。気持ちは焦っているが、まだまだ寒い。決心が付きかねている間に、ライバル達は黙々と特訓を重ねている。今年の目標は、１に健康管理、２にストレス解消なんて考える今日この頃である。でも結果を残すには精進あるのみ。

(O)

ひろば

国土交通省北海道開発局の特集は、その役割をわかりやすく説明してあり、とても役に立ちました。

（稚内市　M. Fさん）

「樽前山の噴火に備えて」について、とても身近な問題なので関心もあり、よくわかりました。

（旭川市　K. Sさん）

自然保護と開発の調和の記事を載せてほしい。

（ニセコ町　Y. Nさん）

「かいはつグラフ」がインターネットでもご覧になれます。

北海道開発局のホームページでは、「ほっかいどうかいはつグラフ」の誌面の一部を掲載しております。掲載している記事は、特集、しごと最前線、事業紹介（17号以降）です。

バックナンバーも見ることができますので、ぜひアクセスしてみてください。

アドレス　http://www.hkd.mlit.go.jp

札幌都心部の快適な交通に一役！

～「北一条地下駐車場」が完成～

札幌市の中心部を通る一般国道230号に「北一条地下駐車場」が完成し、３月７日から供用開始となりました。

この駐車場は、都心部の駐車場不足による路上駐車の増加に対応するため、渋滞しがちな北１条通の拡幅や電線類の地中化と一緒に整備を進めてきたもので、163台の駐車スペースがあります。施設は２層構造で、地下２階が駐車場、地下１階が歩道になっています。整備に当たっては、エレベーターや車椅子専用駐車スペースを設けるなど、体の不自由な方にも安心して利用していただけるよう配慮しています。また、場内での携帯電話の利用も可能で、地下歩道では通行止めや路面状況などの道路情報を提供しています。

今後、この駐車場の利用によって路上駐車が減り、札幌中心街のスムーズな交通に貢献できるものと期待されます。

各国研修員が成果を一般市民に公開

～各国研修員が学んだ北海道開発のノウハウ～

北海道開発局による国際協力事業団（ＪＩＣＡ）を通じた地域開発研修は平成４年度にスタートし、なかでも「地域開発計画管理セミナー」は今年度で９回目を迎えました。今回は、昨年10月から12月にかけて、世界10カ国12名（中国、イラン、コロンビア、ナミビア等）の研修員が北海道開発について学びました。

今回は初めての試みとして、財団法人北海道地域総合振興機構（はまなす財団）の主催のもと、研修員による研修成果発表を一般公開しました。12月９日、一般市民約80名を前に、「インフラストラクチャーと環境」、「森林と河川管理、農業開発」、「地域経済開発と都市化」、「地域経済構造と開発に係る諸課題」の４グループに分かれて発表を行いました。発表後は研修員と参加市民との交流の場が設けられ、研修員の心に残る一日となりました。

・・・開発カレンダー・・・

（　）内は開催地

４月20日
国営滝野すずらん丘陵公園夏期開園

５月15日～23日
総合治水フェア（札幌市・石狩市）

６月上旬
平成13年度　第１回環境セミナー
（札幌第一合同庁舎２階講堂）

６月15日
平成13年度オホーツク水防公開演習
（網走郡美幌町美幌航空公園）

国営滝野すずらん丘陵公園
マスコットキャラクター「きのたん」

「北海道開発グラフ」はエコマーク認定の再生紙を使用しています。